2/11 Sat. holiday

第255回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 255 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/12 Sun.

第255回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 255 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
エリアス・グランディ *–p.5*
ELIAS GRANDY

メゾ・ソプラノ
Mezzo-Soprano
アンナ・ルチア・リヒター *–p.8*
ANNA LUCIA RICHTER

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

モーツァルト
MOZART

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲 ［約7分］ *–p.10*
"Don Giovanni" Overture

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉から"薬屋の歌" ［約4分］
"Don Giovanni", "Vedrai, carino"

歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 ［約4分］
"Le nozze di Figaro" Overture

歌劇〈フィガロの結婚〉から
"自分で自分がわからない" ［約3分］
"Le nozze di Figaro", "Non so più cosa son, cosa faccio"

歌劇〈フィガロの結婚〉から
"恋とはどんなものかしら" ［約3分］
"Le nozze di Figaro", "Voi che sapete"

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲 ［約5分］
"La clemenza di Tito" Overture

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から
"私は行く、でも愛しい人よ" ［約6分］
"La clemenza di Tito", "Parto, ma tu ben mio"

［休憩］
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

交響曲 第1番 ハ短調 作品68 ［約45分］ *–p.14*
Symphony No. 1 in C minor, op. 68
I. Un poco sostenuto – Allegro
II. Andante sostenuto
III. Un poco allegretto e grazioso
IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo, ma con brio

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

芸劇＆読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー　プレコンサート
2月12日（日）の《第255回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時25分から、「芸劇＆読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

2/17 Fri.

第660回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 660 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者） *–p.6*
SEBASTIAN WEIGLE

ヴァイオリン
Violin
金川真弓 *–p.8*
MAYUMI KANAGAWA

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

ベートーヴェン
BEETHOVEN

序曲〈コリオラン〉 作品62 ［約8分］ *–p.16*
"Coriolan" Overture, op. 62

ブラームス
BRAHMS

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77 ［約38分］ *–p.17*
Violin Concerto in D major, op. 77
I. Allegro non troppo
II. Adagio
III. Allegro giocoso, ma non troppo vivace

［休憩］
[Intermission]

シューマン
SCHUMANN

交響曲 第2番 ハ長調 作品61 ［約38分］ *–p.18*
Symphony No. 2 in C major, op. 61
I. Sostenuto assai – Allegro ma non troppo
II. Scherzo: Allegro vivace
III. Adagio espressivo
IV. Allegro molto vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

2/22 Wed.

第625回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 625 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

アンナ・ラキティナ *–p.7*
ANNA RAKITINA

ヴァイオリン
Violin

ルノー・カプソン *–p.9*
RENAUD CAPUÇON

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

エレナ・ランガー
ELENA LANGER

歌劇〈フィガロの離婚〉組曲（日本初演）［約17分］*–p.19*
Opera "Figaro Gets a Divorce" Suite (Japan Premiere)
I. アルマヴィーヴァの城の夜
II. アンジェリカとセラフィン。愛の歌
III. 逃走
IV. 少佐
V. スザンナとケルビーノ。醒めた愛の歌
VI. 狂おしき一日

ベルク
BERG

ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉
［約26分］*–p.20*
Violin Concerto "To the memory of an angel"
I. Andante – Allegretto
II. Allegro – Adagio

［休憩］
[Intermission]

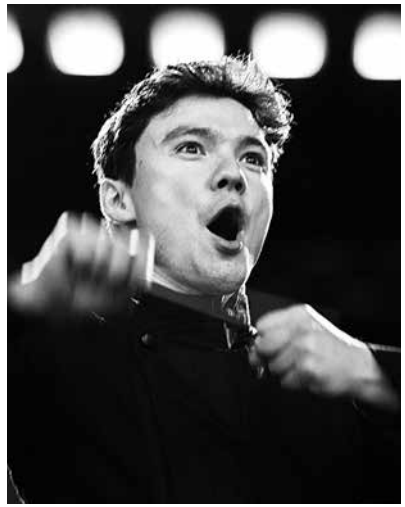
チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

交響曲 第1番 ト短調 作品13 **〈冬の日の幻想〉**
［約44分］*–p.22*
Symphony No. 1 in G minor, op. 13, "Winter Daydreams"
I. 冬の旅の夢想 : Allegro tranquillo
II. 陰鬱な土地、霧深い土地 : Adagio cantabile ma non tanto
III. Scherzo : Allegro scherzando giocoso
IV. Finale : Andante lugubre – Allegro moderato – Allegro maestoso

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

2/11 土曜マチネー
2/12 日曜マチネー
Maestro

指揮
エリアス・グランディ
ELIAS GRANDY, Conductor


©felix broede

ドイツの新鋭が振る 珠玉の名曲選

オペラとコンサートの双方で活躍の場を広げ、確かな技量と傑出した才能で注目を浴びるドイツの新鋭指揮者。

ドイツ人と日本人の両親のもと、ドイツに生まれる。バーゼル、ミュンヘン、ベルリンの各地で指揮とチェロ、音楽理論を学ぶ。ベルリン・コーミッシェ・オーパー管のチェリストを経て、指揮者としてのキャリアをスタートさせる。2015年、ショルティ国際指揮者コンクールで第2位となり、一躍世界的な注目を集めた。12年から16年までダルムシュタット市立劇場の第1指揮者（カペルマイスター）を務め、15年から現在まではハイデルベルク市立劇場の音楽総監督の任にある。モンテヴェルディ、モーツァルトなどバロック、古典派の作品から、ヤナーチェク〈カーチャ・カバノヴァー〉、ハース〈朝と夜〉、ルジツカ〈ベンヤミン〉などの近現代作品まで幅広いレパートリーを誇る。

これまでに、フランクフルト放送響、フランクフルト歌劇場管、ザルツブルク・モーツァルテウム管、ブレーメン・フィル、ミュンヘン響、ルクセンブルク・フィルなどに客演。オペラでは、23年1月にフランクフルト歌劇場のマスネ〈ウェルテル〉で絶賛されたほか、エッセン歌劇場でヴェルディ〈仮面舞踏会〉、ミネソタ・オペラでR. シュトラウス〈エレクトラ〉、ハイデルベルク市立劇場でベルク〈ルル〉、プッチーニ〈蝶々夫人〉などを指揮し、成功を収めた。読響とは20年に初共演して好評を博した。

2/17 名曲 Maestro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

名匠ヴァイグレが振る《ドイツ・ロマン派》

©読響

ドイツの名匠ヴァイグレが、得意のドイツ物からシューマンやブラームスを振り、温かく豊潤な響きを作り上げる。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年にはフランクフルト歌劇場などで活躍し、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年からフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務める。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、15年、18年、20年には同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。19年から読響の第10代常任指揮者を務めている。21年にはメトロポリタン歌劇場でムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉を、22年7月にはバイエルン国立歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場などに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。

読響には16年8月に初登場。オペラでは19年の東京二期会のR. シュトラウス〈サロメ〉（第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞）、昨年7月のワーグナー〈パルジファル〉などで共演し、いずれも好評を博した。

指揮

アンナ・ラキティナ

ANNA RAKITINA, Conductor

注目の新星ラキティナが日本デビュー！

©Robert Torres

2/22 定期 Maestro

アメリカ三大オーケストラで成功を収めた新星ラキティナが、得意のチャイコフスキー作品などで日本デビューを果たす。

1989年、ウクライナ人の父とロシア人の母のもとにモスクワで生まれる。ヴァイオリンを学んだ後、モスクワとハンブルクで指揮を学ぶ。2018年ニコライ・マルコ指揮者コンクールで入賞し、19/20年シーズンにロサンゼルス・フィルのドゥダメル・フェローに選出され、同フィルのユースコンサートを指揮したほか、ロサンゼルス・ユース・オーケストラ（YOLA）など若手育成プログラムや教育・コミュニティ活動でも指揮。

21/22年シーズンにシカゴ響、ニューヨーク・フィル、ボストン響などを指揮して好評を博し、新世代で最もエキサイティングな指揮者の一人として注目を浴びている。19年から現在まで、音楽監督ネルソンスの下でボストン響のアシスタント・コンダクターを務めており、同楽団の歴史で女性指揮者がこのポジションに就くのは史上2人目である。これまでにパリ管、ロサンゼルス・フィル、ケルン・ギュルツェニヒ管、スウェーデン放送響、フランス放送フィル、マルメ響、フィレンツェ五月祭管、バンクーバー響など各地のオーケストラを指揮するほか、タングルウッド音楽祭などにも出演。今後は、ボルティモア響、ハノーファー北ドイツ放送フィル、インディアナポリス響、シンシナティ響、ウィーン・トーンキュンストラー管などへ客演する。

2/11
土曜マチネー
2/12
日曜マチネー
Artist

©Kaupo Kikkas

メゾ・ソプラノ

アンナ・ルチア・リヒター

ANNA LUCIA RICHTER, Mezzo-Soprano

透明感ある歌声と豊かな表現力で世界的に注目を浴びる歌姫。ドイツ・ケルン生まれ。これまでにクルレンツィス指揮ムジカエテルナと頻繁に共演するほか、2021年ザルツブルク音楽祭〈ドン・ジョヴァンニ〉ツェルリーナ役、ケルン歌劇場〈ヘンゼルとグレーテル〉ヘンゼル役などで好評を博す。ハイティンク、ヘンゲルブロック、ロト、アントニーニ、マケラら世界的指揮者のもと、ロンドン響、パリ管、ブダペスト祝祭管などと共演。ルツェルン音楽祭、BBCプロムス、ラインガウ音楽祭などにたびたび登場し、カーネギーホール、ウィグモアホールにも出演。23年4月にはウェルザー＝メスト指揮ウィーン・フィルによる〈マタイ受難曲〉のソリストを務める。読響初登場。

2/17
名曲
Artist

音楽への飽くなき探求心と、豊潤かつ深い音色で国際的に活躍する新鋭。ドイツ生まれ。12歳でロサンゼルスに移り、現在ベルリンを拠点に活躍中。ハンス・アイスラー音楽大学でブラッハーに師事。2018年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第2位入賞および最優秀協奏曲賞、19年チャイコフスキー国際コンクール第4位を受賞し、一躍注目を浴びた。これまでに、プラハ放送響、マリインスキー劇場管、モスクワ・フィル、フィンランド放送響、ドイツ・カンマーフィルなどと共演するほか、22年はロイヤル・フィルやベルリン・コンツェルトハウス管へデビューを果たした。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス1725年製作「ウィルヘルミ」。読響とは21年のヴァイグレ指揮以来、2度目の共演。

©Kaupo Kikkas

ヴァイオリン

金川真弓

MAYUMI KANAGAWA, Violin

©Simon Fowler Erato

ヴァイオリン

ルノー・カプソン

RENAUD CAPUÇON, Violin

艶やかな音色と完璧なテクニックで世界各地の聴衆を魅了するヴァイオリンの名手。ソリストとして第一線で活躍しており、ハイティンク、バレンボイム、ドホナーニ、ハーディング、ロトらの指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ボストン響、ロンドン響、シカゴ響、パリ管などと共演を重ねてきた。ザルツブルク音楽祭やルツェルン音楽祭など世界最高峰の音楽祭でも活躍。CDもワーナー・クラシックスなどから多数リリースし、数多くの賞を受賞。2013年に自身が創設したエクサンプロヴァンス・イースター音楽祭の音楽監督、16年からグシュタート冬音楽祭の音楽監督を務めている。フランスのシャンベリ生まれ。パリ国立高等音楽院にて学んだ後、ベルリンでブランディスとスターンに師事。読響とは今回が3回目の共演となる。

2/22
定期
Artist

モーツァルト
歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲
歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉から“薬屋の歌”
歌劇〈フィガロの結婚〉序曲
歌劇〈フィガロの結婚〉から“自分で自分がわからない”
歌劇〈フィガロの結婚〉から“恋とはどんなものかしら”
歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲
歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“私は行く、でも愛しい人よ”

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756〜91）のオペラは、人間模様の万華鏡だ。彼のオペラの数曲は18世紀以前のオペラの中で例外的に高い人気を誇っているが、そこにはいつの時代も変わらない人間の心の襞（ひだ）が刻まれている。今日演奏される作品は、そんなモーツァルトの美質が遺憾なく発揮された傑作揃いである。

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉（作曲：1787年／初演：1787年10月29日、プラハ）

伝説のプレイボーイの破滅を描いたダイナミックなオペラ。悪人の主人公が滅ぶのでハッピーエンドの「オペラ・ブッファ」（イタリア語の喜劇オペラ）に分類されるが、「死」で始まり「死」で終わる物語や、明暗のコントラストに富んだ音楽が特徴。モーツァルトのオペラの中でも最も劇的な作品に数えられ、19世紀ロマン派オペラへの道を開いた傑作である。

序曲 ドン・ジョヴァンニが地獄へ落ちる場面の音楽を転用した序奏で始まる、衝撃的な序曲。冒頭で、ドン・ジョヴァンニを地獄へ導く騎士長の登場で聴こえるニ短調の和音が鳴り響く。主部は一転してニ長調となり、ドン・ジョヴァンニの活躍を表すように闊達に展開する。**“薬屋の歌”** 農民の娘ツェルリーナは農夫のマゼットという婚約者がいながらドン・ジョヴァンニに誘惑されるが、マゼットの元へ戻ってくる。このアリアは、ドン・ジョヴァンニに殴られたマゼットを慰めるチャーミングな歌。彼女が自分のハートを薬に例えて歌うため、“薬屋の歌”と呼ばれる。

歌劇〈フィガロの結婚〉（作曲：1785年〜86年／初演：1786年5月1日、ウィーン）

雇い主のアルマヴィーヴァ伯爵に婚約者のスザンナを奪われそうになった従僕のフィガロが、スザンナや伯爵夫人と組み伯爵をやり込めるオペラ・ブッファ。原作はフランスの劇作家ボーマルシェの同名の戯曲で、身分制度に逆らう内容で度々上演が禁止された問題作だった。オペラは男女の心の襞によりフォーカスし、原作より普遍的な魅力を持った作品となっている。

2/11 土曜マチネー
2/12 日曜マチネー
Program Notes

序曲 〈フィガロの結婚〉はモーツァルトのオペラの中でも〈魔笛〉と並んでヒットメロディが多い作品だが、序曲はその代表格だろう。8分音符で動き回る躍動的な主題が弱音のユニゾンで奏でられ、たちまち強音へと至る。痛快な音楽劇の幕開けにふさわしい、疾走感に富んだ音楽である。**“自分で自分がわからない”**「女性が演じる」と定められた小姓のケルビーノは、思春期まっただ中で、女性を追いかけては騒動を起こすお騒がせキャラクター。このアリアでは、若い男性のコントロールできない欲望が、激しく上下する音楽で描かれる。**“恋とはどんなものかしら”** ケルビーノが手紙を読むという形で、秘めた思いを伯爵夫人に伝える佳曲。歌に先立って曲のメインテーマを予告する管楽器も聴きもの。

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉（作曲：1791年／初演：1791年9月6日、プラハ）

モーツァルトが最後に作曲したオペラで、皇帝レオポルト2世のボヘミア王戴冠を祝うために書かれた。物語は、古代ローマの皇帝ティトゥス（オペラのティート）が反乱者を許したエピソードに基づき皇帝の慈悲深さを讃えるもので、ほぼ半世紀にわたって祝典オペラの題材として好まれた。モーツァルトはお馴染みの物語に深い人間描写を加えている。

序曲 祝典オペラにふさわしい、ハ長調の堂々とした序曲。ファンファーレを伴う壮麗な第1主題と、管楽器による軽快な第2主題を擁（よう）したソナタ形式で、交響曲の1楽章のように充実した音楽である。**“私は行く、でも愛しい人よ”** ティートの親友セストは、皇妃の座を切望する恋人のヴィッテリアにティートの暗殺を唆（そそのか）される。このアリアは、ティートの暗殺に向かうセストが揺れる心を歌う大アリアで、音域も広く、コロラトゥーラも要求される難曲。高揚する心に合わせてテンポが速まり、クラリネットのオブリガートが寄り添う。

〈加藤浩子 音楽評論家〉

演奏時間：楽器編成／**【歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲】**約7分：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部 **【同歌劇から“薬屋の歌”】**約4分：フルート2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ **【歌劇〈フィガロの結婚〉序曲】**約4分：（歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲と同） **【同歌劇から“自分で自分がわからない”】**約3分：クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ **【同歌劇から“恋とはどんなものかしら”】**約3分：フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン2、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ **【歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲】**約5分：（歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲と同） **【同歌劇から“私は行く、でも愛しい人よ”】**約6分：オーボエ2、クラリネット、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ

《歌詞対訳》

歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉から“薬屋の歌”

Vedrai, carino,
se sei buonino,
che bel rimedio
ti voglio dar.

いいこと、愛しいあんた、
ちょっぴり大人しくすれば
それはよく効くお薬、
あたしはあんたにあげたいの。

È naturale,
non dà disgusto,
e lo speziale
non lo sa far.

それって天然自然で
苦くなんかなくて
てことは薬屋さんじゃ
つくることができないの。

È un certo balsamo
che porto addosso:
dare te'l posso,
se'l vuoi provar.

それってなにか香油みたいで
あたしが体の中に持っていて、
だからあんたにあげてもいいのよ、
もしそれをためしてみたければ。

Saper vorresti
dove mi sta?
Sentilo battere,
(facendogli toccar il core)
toccami qua.

ですもの知りたいのでは、
それがあたしのどこにあるか?
それがドキドキしてるの、感じてみて、
(胸に触らせながら)
あたしのここにさわってみて。　(訳:小瀬村幸子)

歌劇〈フィガロの結婚〉から“自分で自分がわからない”

Non so più cosa son, cosa faccio,
or di foco, ora sono di ghiaccio,
ogni donna cangiar di colore,
ogni donna mi fa palpitar.

僕はもう分からない、自分が何か、何しているのか、
今、火のようで、今、氷のようで
どんなご婦人も僕の顔色を変わらせ
どんなご婦人も僕をドキドキさせる。

Solo ai nomi d'amor, di diletto,
mi si turba, mi s'altera il petto
e a parlare mi sforza d'amore
un desio ch'io non posso spiegar.

恋や楽しみやらという言葉だけで
僕は胸が騒ぎ、揺れ、
そして僕に恋の話をさせてしまう、
自分で説明できない何か憧れが。

Parlo d'amor vegliando,
parlo d'amor sognando,
all'acque, all'ombre, ai monti,
ai fiori, all'erbe, ai fonti,
all'eco, all'aria, ai venti,
che il suon de' vani accenti
portano via con sé.

僕は目覚めながら恋を語り
夢見ながら恋を語る、
水に、影に、山々に、
花に、草に、泉に、
こだまに、大気に、風に、
でも風は虚しい言葉の響きを
運び去ってしまう。

E se non ho chi m' oda,
parlo d'amor con me.

そして誰も聞いてくれる人がいないと
僕は自分に恋を語ってしまう。　(訳:小瀬村幸子)

歌劇〈フィガロの結婚〉から“恋とはどんなものかしら”

Voi che sapete
che cosa è amor,
donne, vedete
s'io l'ho nel cor.

あなた様方はご存じです、
恋とはどんなものか、
ですからご婦人方、ご覧ください、
僕が心に恋を抱いているかどうか。

Quello ch'io provo
vi ridirò,
è per me nuovo
capir nol so.

僕が感じていることを
あなた様方に申してみます、
こんなことは僕には初めて、
それでこれが何か分かりません。

Sento un affetto
pien di desir,
ch'ora è diletto,
ch'ora è martir.

僕はこんな思いを感じています、
何かが欲しくて仕方ないような、
それでこれは時に喜び、
また時に苦しみです。

Gelo e poi sento
l'alma avvampar,
e in un momento
torno a gelar.

僕は身が凍り、でもまた感じます、
魂が燃え上がるのを、
そして一瞬のうちに
また身が凍ります。

Ricerco un bene
fuori di me,
non so chi'l tiene,
non so cos'è.

僕は幸せを探し求めています、
自分のそとの誰かに、
でも誰がそれを持っているのか、
それが何か分かりません。

Sospiro e gemo
senza voler,
palpito e tremo
senza saper.

僕は溜息し、嘆きます、
そうするつもりなしに、
胸高鳴らせ、震えます、
知らないうちに。

Non trovo pace
notte né dì,
ma pur mi piace
languir così.

僕は安らぎがありません、
昼も夜も、
けれどそれでも楽しいのです、
こうして思い悩むのが。

Voi che sapete
che cosa è amor,
donne, vedete
s'io l'ho nel cor.

あなた様方はご存じです、
恋とはどんなものか、
ですからご婦人方、ご覧ください、
僕が心に恋を抱いているかどうか。(訳:小瀬村幸子)

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“私は行く、でも愛しい人よ”

Parto, parto, ma tu ben mio,
meco ritorna in pace;
sarò qual più ti piace;
quel che vorrai farò.

目的に向かいましょう、しかし、愛する君よ
一緒に安らぎへと戻るのです。
あなたの求める以上の者になりますから
あなたが望むことを私は行動に移しますから。

Guardami, e tutto oblio,
e a vendicarti io volo;
a questo sguardo solo
da me si penserà.

私を見てください、そうすれば私はすべてを忘れ
あなたの復讐のために駆けて行きましょう。
あなたのこの眼差しだけを
私はただ心に思っています。

Ah qual poter, oh Dei!
donaste alla beltà!

ああ、どれほどの力を、おお神々よ、
あの美しい女性に与えたのです!　(訳:河原廣之)

ブラームス
交響曲 第1番 ハ短調 作品68

モーツァルトが最後のオペラを書き、その数ヶ月後に世を去って85年。ヨハネス・ブラームス（1833〜97）の交響曲第1番が初演された。構想から完成までおよそ20年。満を持しての初めての交響曲だった。

ブラームスはオペラを書いていない。18世紀、オペラを書かない作曲家は二流だった。時代は変わった。ベートーヴェンの活躍から器楽の全盛期が始まった。オペラを書かなくても一流と認められるようになったのだ。ブラームスがベートーヴェンを意識して、なかなか交響曲を完成できなかったことはよく知られているが、作曲家の職分の面では大いに恩恵を受けたとも言える。モーツァルトは器楽曲もオペラのキャラクターを描くように作曲したが、ブラームスは素材としての音楽を練り鍛えた。旋律も形式も明確な輪郭を持つモーツァルトの傑作交響曲が晴れた空に浮かぶ秀峰なら、悠然とした空気と激情や高揚が同居するブラームスの交響曲は、深い森林に覆われ、雲を靡（なび）かせた高峰である。

第1番は4曲あるブラームスの交響曲の中でも、ベートーヴェンの交響曲第9番との類似が指摘される第1主題をもつ終楽章の堂々とした高揚感で、山に登る達成感をもっとも味わえる名作である。第4楽章の序奏でホルンが鳴らす旋律が誕生日の贈り物だったことをはじめ、永遠の恋人であるクララ・シューマンへの想いが随所に織り込まれており、その点も私的な感情を重視するロマン派らしい作品である。

第1楽章　ウン・ポコ・ソステヌート〜アレグロ、ハ短調、8分の6拍子、序奏つきソナタ形式　**第2楽章**　アンダンテ・ソステヌート、ホ長調、4分の3拍子、複合三部形式　**第3楽章**　ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ、変イ長調、4分の2拍子、複合三部形式　**第4楽章**　アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロッポ、マ・コン・ブリオ、ハ短調〜ハ長調、4分の4拍子、序奏つきソナタ形式

〈加藤浩子 音楽評論家〉

作曲：1862年〜76年／初演：1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン
序曲〈コリオラン〉作品62

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）は“押し売り”の常習犯だった。たとえば〈ディアベリ変奏曲〉作品120。出版社は、用意した主題を元に2、3の変奏曲を作って欲しい、と依頼した。それに対して作曲家は、33もの変奏曲を送りつける。序曲〈コリオラン〉作品62の作曲の経緯にも、そんなベートーヴェンの押しの強さがあらわれている。

劇作家のハインリヒ・フォン・コリンは1802年、ローマ神話の英雄コリオラヌスを主人公に据えた悲劇を書き、同年冬に宮廷劇場で初演した。人気は長く持続し、05年になっても再演が好評を博していた。その様子を見て、どういうわけか奮起したのがベートーヴェンだ。作曲家はこの悲劇を元に序曲を書くことを思いつく。それを実行に移したのが07年初頭。同年3月に初演し、コリンに曲を献（ささ）げた。

こうした経緯に鑑（かんが）みると、この作品がいわゆる劇伴音楽とは異なることが分かる。ベートーヴェンは芝居に沿った効果音的な音楽を書いたわけではなく、戯曲に触発されて、その悲劇性を単一楽章の管弦楽曲で抽象的に表現している。ここに、“芝居から切り離された序曲”である「演奏会用序曲」が生まれた。もっと言えばこの一篇は、後世「交響詩」と呼ばれるジャンルの嚆矢（こうし）でもある。

作品はソナタ形式。この序曲の描く悲劇性は、冒頭の短くも力強い序奏にすべて込められている。主音の強奏に、暗雲を仄（ほの）めかす和音が続く。いったん主音に戻るが、すぐに悲痛な叫びが響き渡る。またも主音に安定するが、それも束の間、先ほどの仄めかしが確信に変わる。かりそめの落ち着きを経て再び緊張感を高め、アレグロの主部に入っていく。

主部では、うごめくような第1主題を示してから、全音低い調でそれを繰り返し、悲劇の底をいっそう深く掘り進む。優美な第2主題は対比的だが、響きの基調は♭系から変化しないので、禍（わざわ）いの影が付き纏（まと）う。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1807年初頭／初演：1807年3月、ウィーン／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ブラームス
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

ヨハネス・ブラームス（1833〜97）のヴァイオリン協奏曲には、作曲家の他にもうひとり“共作者”がいる。ヨーゼフ・ヨアヒム（1831〜1907）である。ヨアヒムは19世紀後半に活躍したヴァイオリニストだ。

ブラームスは1853年、この卓越した演奏家と出会う。ヨアヒムはブラームスの作品を聴き、ブラームスはヨアヒムの演奏を聴いて相互に理解を深め、以後、親しく交わるようになった。作曲家はヴァイオリニストの22歳の誕生日を祝い、半ば冗談で〈偉大なヨアヒムを称える讃歌〉を書いたことがある。両者の打ち解けた関係が、その後の曲作りにも活きている。

1878年8月、ブラームスはヨアヒム宛の手紙に、協奏曲の構想を書き付けた。作曲家は独奏声部の楽譜の一部を送り、演奏家に助言を求めている。ここから二人三脚の協奏曲創作が始まった。

当初、4楽章構成を志向していたブラームスは秋ごろ、アダージョとスケルツォを書き進めるが、しばらくしてスケルツォを取り下げた。両端楽章と新たに作曲したアダージョとの3楽章を12月に脱稿。その楽譜をベルリンのヨアヒムに送る。作曲者のピアノ（管弦楽パート）とヨアヒムの独奏による試演を経て、翌月1日に初演をおこなった。

第1楽章　ソナタ形式。中音域以下のパートが第1主題を弾く。当時の批評家ハンスリックは、分散和音風に上下するメロディーを、ベートーヴェンの〈英雄〉と並べて論じている。第2主題は大きく跳躍する旋律線を第1主題と共有するも、半音進行によって優美さを纏う。

第2楽章　三部形式。オーボエの主題が印象的。中間部はヴァイオリンの独擅場（どくせんじょう）で、広い音域を丁寧に“縫い進む”様子が美しい。

第3楽章　ロンド・ソナタ形式。ロマ音楽風の主題の間を埋めるエピソードの多様性が面白い。かど張った重音、バネのある跳躍、なめらかな音階と、独奏ヴァイオリンのさまざまな魅力を前面に押し出す。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1878年／初演：1879年1月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

シューマン
交響曲 第２番 ハ長調 作品61

ロベルト・シューマン（1810〜56）を交響曲の作曲へと向かわせたのは、ベートーヴェンとシューベルトだ。1820年代末にベートーヴェンの交響曲の連続演奏会を耳にした経験が、新進作曲家をシンフォニーの創作へと駆り立てた。

シューマンがウィーンのシューベルトの遺族を訪ねたのは1839年の初め。その際、先輩作曲家の遺作の束から、未知の作品を発見する。これが今日〈グレイト〉の愛称で知られる交響曲ハ長調だ。雷に打たれるような衝撃を受けたシューマンは、この楽譜を急ぎライプツィヒのメンデルスゾーンに送り、初演への道筋をつけた。

こうしたベートーヴェン／シューベルト体験により、若き作曲家は交響曲作家の道を本格的に歩み出し、第1番と第4番（いずれも1841年）の両曲を生んだ。

1845年12月9日、ドレスデンにいたシューマンは、コンサートで〈グレイト〉を再び耳にする。それは作曲家の衰弱した心身を蘇らせ、シンフォニー創作の種火に燃料を投下した。演奏会の3日後から新曲のスケッチをはじめ、翌年2月までに骨子を固めて管弦楽付けに突入、10月まで断続的に筆を入れ、11月の初演に漕ぎ着けた。この新曲こそ交響曲第2番である。

第1楽章　序奏冒頭に登場する、金管群による完全5度跳躍のモットーが重要。コーダでも様相を変えつつ新鮮に鳴り響く。主部は付点リズムと上行・下行音型とを中心に展開する。

第2楽章　小ロンド風のスケルツォ。2つのトリオのうち2番目が終楽章を先取りする。

第3楽章　ロンド形式のアダージョ。冒頭の6度跳躍が楽章の憧憬（しょうけい）に満ちた性格を印象付ける。

第4楽章　付点リズムの活気ある主題が耳を引く。ティンパニの長いドラムロールの後に現れるコラール主題は、ベートーヴェンの歌曲〈受けたまえこの歌を〉を引用している。この主題と第1楽章のモットーが絡み合って伽藍（がらん）を築くように進み、作品を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1845〜46年／初演：1846年11月5日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

エレナ・ランガー
歌劇〈フィガロの離婚〉組曲（日本初演）

ロシア出身の英国の作曲家エレナ・ランガー（1974〜）は、グネーシン音楽院、モスクワ音楽院でピアノと音楽学を学び、1999年からロンドンに移り、ジュリアン・アンダーソン、サイモン・ベインブリッチに作曲を師事した。

歌劇〈フィガロの離婚〉は、モーツァルトの歌劇〈フィガロの結婚〉（1786年初演）のその後を描いたもので、カーディフのウェールズ・ナショナル・オペラの委嘱で作曲された。台本は同歌劇場の芸術監督ディヴィット・パウントニーが、劇作家フォン・ホルヴァートの同名の戯曲（1936）と、〈セビリアの理髪師〉〈フィガロの結婚〉に続くボーマルシェの「フィガロ3部作」の3作目、戯曲〈罪ある母〉をもとに自ら手がけた。初演後、シアトル交響楽団からの委嘱で6曲から成る管弦楽用組曲が編まれ、組曲版初演の指揮はマクシム・エメリャニチェフが務めた。

舞台は20世紀。戦争で荒廃した国のアルマヴィーヴァ伯爵の城。組曲ではオペラのエッセンスを散りばめた6曲が（譜面上では）切れ目なく演奏される。**第1曲「アルマヴィーヴァの城の夜」**夜の帳（とばり）に覆われた城。**第2曲「アンジェリカとセラフィン。愛の歌」**実は兄妹である二人は愛し合う。セラフィンは伯爵夫人とケルビーノの子ども。**第3曲「逃走」**打楽器の刻みにのせて音楽は疾走し、ホイッスルも鳴り響く。**第4曲「少佐」**アンジェリカとの結婚を望む革命軍の二重スパイの少佐。ジャズ風に、下品にと記された音楽は、アコーディオンやピアノが入る。**第5曲「スザンナとケルビーノ。醒めた愛の歌」**ケルビーノが経営するナイトクラブにやってきたスザンナ。気だるいピアノに様々な楽器が絡む。**第6曲「狂おしき一日」**ボンゴやシロフォンが特徴的なリズムを刻み、ナイトクラブの雰囲気を引き継ぎながら、最後はミュージカル風な盛り上がりをみせ、決然と結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2015年／初演：2016年2月11日、カーディフ（オペラ）、2020年1月9日、シアトル（組曲版）／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、中太鼓、ゴング、トライアングル、タンブリン、マラカス、ラチェット、レインスティック、スレイベル、ポリスホイッスル、鞭、クラベス、ウッドブロック、ギロ、ボンゴ、銅鑼、鐘、サスペンデッド・シンバル、クラッシュ・シンバル、クロテイル、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン）、ピアノ、チェレスタ、アコーディオン、弦五部

ベルク
ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉

新ウィーン楽派のアルバン・ベルク（1885〜1935）は、1935年夏に「ある天使の思い出に」と献辞を付したヴァイオリン協奏曲を完成させた。「ある天使」とは、マーラーの未亡人アルマと、彼女が再婚した建築家ヴァルター・グロピウスとの間の娘マノン・グロピウスのこと。彼女は同年4月22日に、病気のため19歳の若さで世を去った。ベルクはマノンの訃報を受けて、1928年以来専念していた歌劇〈ルル〉の作曲を一時中断し、この協奏曲（アメリカのヴァイオリニスト、ルイス・クラスナーの依頼を受けて、2月から着手していた）に集中し、作曲者にとって異例のスピードでの完成となった。

全体は、それぞれ二つの部分から成る2楽章で構成され、シェーンベルク門下のベルクは、師が創案した12音技法を用いて作曲した。この作品の基本音列は長3和音と短3和音を含む音列のため、楽曲全体が無調と後期ロマン派の調性感の間を浮遊するような独特の響きに特徴がある。さらにベルクが示唆したプログラムによれば、第1楽章は天使のように美しいマノンの思い出、第2楽章はマノンの苦しみと死、そして天国への昇天が描かれる。マノンのレクイエムとして書かれた作品であるが、すでに楽曲の全体構想や音列は、訃報以前から出来上がっていて、それだけではない含みもこの作品にはある。ベルクの初恋の相手の出身地であるケルンテン地方の民謡が現れたり、第2楽章後半でベルクの晩年の恋人ハンナ・フックス＝ロベッティンを音楽構造のなかで暗示する仕掛けを用いたり、さらにはバッハのカンタータも引用される。

作曲中のベルクは、背中に出来た腫瘍に悩まされ、体調が思わしくなかった。そうしたなかで死を意識することもあり、自らの人生もこの作品に重ねたのかもしれない。同年12月24日にベルクは敗血症で亡くなり、この協奏曲は自身へのレクイエムにもなった（そのため〈ルル〉のオーケストレーションは第3幕の途中で終わった）。この作品に込められた意味をめぐっては、のちの研究者によって様々に解釈されてきたが、真意は解明されず謎のまま残されている。そのことがまた、この作品をいっそう魅力的なものにしていると言えるだろう。

初演は、1936年4月19日に、委嘱者のクラスナーがヴァイオリン独奏を務め、当初はウェーベルンが指揮する予定だったが、最終リハーサルの後、ウェーベルンがキャンセルしたため、ヘルマン・シェルヘンが代わりに指揮をした。

第1楽章　アンダンテ、4/4拍子〜アレグレット、6/8拍子　独奏ヴァイオリン、クラリネット、ハープが、基本音列にもとづく動機を最弱音でゆるやかに反復する導入で始まる。なかでも、独奏ヴァイオリンの開放弦によるソレラミという5度音程の動機が印象的だ。主部は、独奏ヴァイオリンで基本音列が示され、新しい楽想を含みながら静かに進められる。冒頭の導入の反復動機を経て、快活な後半は、基本音列から作られたスケルツォ風の楽想やウィーン風のゆったりした楽想などが様々な表情をみせる。最後に、独奏ヴァイオリンの背後でケルンテン地方の民謡が静かにホルンからトランペットへと受け継がれる。

第2楽章　アレグロ、3/4拍子〜アダージョ、4/4拍子　激しい不協和音で始まり、独奏ヴァイオリンがカデンツァ風に自由に展開し、付点のリズムが特徴的な動機を執拗（しつよう）に反復する。独奏ヴァイオリンが技巧を繰り広げる静かな中間部を経て、息詰まる緊迫感が戻ってくる。そしてゆるやかな後半は、バッハのカンタータ第60番〈おお永遠よ、恐ろしき言葉〉の終曲のコラール“われは満ち足れり”の引用で始まる。コラールは、独奏ヴァイオリン、続いてバッハの和声づけのままクラリネットとバスクラリネットに現れる。この提示の後、穏やかな二つの変奏となり、再びケルンテン地方の民謡が「遠くから響いてくるように」回想される。最後は、コラールの響きを背景に独奏ヴァイオリンが静かに歌う。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1935年／初演：1936年4月19日、バルセロナ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼、ゴング）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー
交響曲 第1番 ト短調 作品13〈冬の日の幻想〉

「あなたがこの作品を知っているかはわかりません。多くの点において未熟だとしても、本質的に他の多くの作品より優れ、豊かな内容になっています」。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）が、1883年秋にフォン・メック夫人に宛てた手紙に記した「この作品」とは、66年に書き上げた交響曲第1番のことである。

前年にペテルブルク音楽院を卒業した若き作曲家は、同年3月、ピアニスト・指揮者でモスクワ音楽院の創設者ニコライ・ルビンシテイン（1835〜81）に交響曲の作曲を勧められた。すぐにスケッチを開始し、猛烈な勢いで仕事に取り掛かるも、以前の作品が酷評されたり、7月に精神性の発作から作曲を中断するなど苦労する。完成直前にニコライの兄で音楽院時代の作曲の師であるアントンに楽譜を見せると、厳しく批判された。彼の指摘に従い、修正を加えて11月に見せたところ、演奏が許されたのは第2、第3楽章だけだった（ソナタ形式の両端楽章は許可されなかった）。まずは、1866年に第3楽章のみが演奏され、翌年に第2、第3楽章、68年にようやく全曲が、ニコライの指揮によって初演された。

青年時代のチャイコフスキーにとって、ルビンシテイン兄弟の存在はとても大きかった。アントンは徹底的にプロ意識を作曲家に植え付け、ニコライはその才能をいち早く見抜いてモスクワ音楽院教授に招聘（しょうへい）し、彼の作品の解釈者として支援を惜しまなかった。作曲に没頭できるようにいつも励まし、ニコライが取り上げることで作曲家としてのチャイコフスキーの知名度も上がっていった。交響曲第2番〈小ロシア〉（1872年）が初演される頃には、第1番の楽譜出版の話も持ち上がり、出版に向けて74年に大幅な改訂が行われた。第1楽章の第2主題を新しく書いて差し替え、第2、第3楽章を短縮、第4楽章は大幅に書き換えた。楽譜は翌年に出版され、初演は83年。苦心惨憺（さんたん）して完成させた愛着のある作品に対する思いは、冒頭に引用した手紙からもうかがえるだろう。もちろん、作品はニコライに献呈された（なお、この初演前後にも若干の改訂を行っている）。

交響曲冒頭の2つの楽章にはチャイコフスキーによって、ロシアの大地と冬の情景を思わせる標題が付されている。

第1楽章　冬の旅の夢想　アレグロ・トランクィロ ト短調 2/4拍子　いきなり登場するフルートとファゴット2本による第1主題はロシアの寒々とした風景を思わせる。クラリネット独奏で温かい第2主題が現れ、展開部は低弦と木管の穏やかな掛け合いで始まる。3小節の全休止をはさみ、低弦とホルンの響きに導かれ、ヴァイオリンで第1主題、フルートとクラリネットで第2主題が再現される。

第2楽章　陰鬱（いんうつ）な土地、霧深い土地　アダージョ・カンタービレ・マ・ノン・タント 変ホ長調 4/4拍子　チャイコフスキーがペテルブルク北方のラドガ湖を旅行したときの印象を反映しているとされる。静かな弦楽器の序奏に続いて、オーボエが寂しげな第1主題をしみじみ歌う。第1主題から派生した牧歌的な第2主題はフルートとヴィオラで示される。二つの主題が交互に現れ、最後に序奏が戻ってくる。

第3楽章　スケルツォ　アレグロ・スケルツァンド・ジョコーソ ハ短調 3/8拍子　木管の導入に続いて、弱拍が強調された独特のリズムの主部には、音楽院卒業の年に書かれたピアノ・ソナタの一部が転用されている。中間部はワルツ風の滑らかな主題が印象的で、すでにチャイコフスキーのワルツへの偏愛が示されている。

第4楽章　フィナーレ　アンダンテ・ルグーブレ ト短調 4/4拍子　ファゴットが全休止をはさみながら現れ、主題はだんだんと形を整えていく。これはロシア民謡〈小さな花よ咲け〉に基づく。主部（アレグロ・マエストーソ ト長調 2/2拍子）は、堂々とした第1主題にフガートの部分が続き、序奏と同じ民謡にもとづく第2主題が勢いよく現れる。展開部を経て、再現部で二つの主題が再現された後、ゆるやかな序奏が回想され、最後は力強く華やかな音楽で結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1866年、1874年（改訂）／初演：1866年12月22日、モスクワ（第3楽章のみ）、1867年2月23日、サンクトペテルブルク（第2、3楽章）、1868年2月15日、モスクワ（全曲）、1883年12月1日、モスクワ（改訂版）／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部